
リボーンに転生トリップしちゃいましたー!?

水月穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リボーンに転生トリップしちゃいましたー!？

【Nコード】

N0132Z

【作者名】

水月穂

【あらすじ】

はい、はじめまして

水月穂です

フラン大好きです

虐めが少し入るかも…

でもネタバレするとボンゴレ全員（ヴァリアー除く）味方

設定

吹雪 雪

大人しくて優しい性格

いつもニコニコしていて皆を癒してくれる

喋り方はフランと同じ

転生する前は中二

二重人格で普段は優しく冷静だがもう一つの人格は残酷で熱い性格
もう一つの人格の名前は霰^{あられ}

そのせいでかなり頭を悩ませてる

転生する前、事故で家族全員死んでる

属性は大空の七属性と雪

武器は幻術、ナイフ↑霰の時に使う、扇

吹雪 霰

事故で死んだ雪の姉

熱い性格

今は人格として雪の中に取り付いてる

属性、雪の説明

雪の炎は白くて雪の結晶が舞っている

雪の特性は凍結

プロローグ

雪side

部活で遅くなりました

買い物して帰らないとです

今日はテストで100点取ったからご褒美にハーゲンダッツでも買
いましょうかね……………

ん？

猫「ニャン」

猫が道路に飛び出しました

危ない！！

ミーは咄嗟に猫を庇って宙に舞いました……

朦朧とする、意識の中で見たものは、血まみれになってる猫です…

……

……………守れなかったんですね

そこで私の意識がなくなりましたー

雪「ここは………何処ですか？」

ここは真っ白な部屋

猫「ニャン♪」

雪「お前も来たんですか？」

猫「そうだよ、雪ちゃん♪」

雪「へ？喋った!？」猫『私の言葉が分かるの!？』

ガチャ

雪、猫「??！」

???'「えっと………その……スマン!!」

雪「なんで謝ってるんですか？」

???'「わしは神様なんじゃが、おぬしを誤って殺してしまったんじゃない」

雪「それは仕方のないことですよ、命あるもの必ず死ぬんですから」

神様「じゃが………そうだ!! おぬしをリボーンの世界に転生させてやる」

雪「本当ですか?!」

神様「ああ、そのかわりアルコバレノになってもらうがな」

雪「へ！？」

神様「おぬしには雪という珍しい属性が有るから」

雪「そうなんですか……分かりました」

神様「原作ブレイクもやっていいし、あと、未来編に近づいてきたらちよう強力なおしゃぶりケースをやろう」

雪「分かりました」

神様「それとその猫をペットにもして良いぞ？」

猫『やった』

神様「雪の炎の特性は凍結じゃ、くれぐれも気をつけるように」

雪「はい」

標的ー アルコバレーノになる日

雪side

あれから3年が経ちました……

三年間の事を纏めると

1. 私は大空の七属性全部を持っていること
2. 神様から連絡があって虹の属性っていうイレギュラーがある
3. 原作にはでてこないイレギュラーが出てくる可能性がある
4. 早速虹の波動を持つイレギュラーを発見
5. フランが虹の波動を持ち、今日、一緒にアルコバレーノになる
6. 私とフランは幼なじみ
7. なんだかんだでフランと一緒に骸との修業を受けている
……しかしフランと幼なじみでイレギュラー化するなんて驚きです
だってフランは私の見たところ十代、でもそれは十年後の歳であつて、原作突入時はまだ一桁の歳のはず……

しかもこれは原作突入時の十年前くらい……

あ、そういえば九代目はもうツナに会いましたかね？ フラン「雪？」

行きましゅよー？」

雪「うん」

因みに私が転生者ということは言ったよ

師匠にも…………

ちゃんと受け止めてくれて嬉しかったな

あ、因みにここはイタリアのホテル

とりあえず幻覚で親を作った

雪「行こう、フラン」

フラン「はいー」

待ち合わせ場所

??? 「遅い……………」

??? 「ムムツ…僕を待たせるなんて罰金だよ」

??? 「しょうがないですよ、まだ三歳児なんですから」

??? 「そうよ……………それにそろそろ来るわ」

??? 「しかし、なんであんな小さな子が選ばれたんだ？」

??? 「あいつら小さいながらかなり凄腕のヒットマンだ」

??? 「あんな小さい子供がか!？」

??? 「俺が調べたところ、最近有名になってきた奴らだ」

??? 「通り名は？」

??? 「コンビ名はアルカンシャル・ネージュ、通り名はフランの
ほうが虹の幻術師、雪のほうが二重の雪」

??? 「二重？」

??? 「由来は二重人格で普段は穏やかで殆ど幻術で倒してるがも
う一つの人格は熱く残酷にナイフで殺して来た、雪の通り名は後二
つ有るが聞くか？」

??? 「どんな通り名？」

??? 「雪の舞姫、雪の切り裂き姫」

雪「……………何勝手に人のことはなしてるんですか？ヴェルデ」

ヴェルデ「ふん、何故お前達が最強の九人に選ばれた理由を話して
ただけだ」雪「あ、そう」

フラン「えっと」

雪「遅れました、先輩方」

フラン「すいませんでしたー」

リボーン「棒読みで言われてもな」

フラン「あ、これがミーの喋り方でしゅのでー」

雪「早く逝きましょう？」

ルーチェ「漢字が違うわよ……」

雪「ところでお腹の赤ちゃん元気ですか」

ルーチェ「ええ」

雪「よかったです」

ルーチェ「ありがとう」

リボーン「あの二人……気が合うみたいだな」

フラン「二人とも、人を疑う事を知りましえんから」

リボーン「言うじゃねえか………気に入った」

フラン「どうもでーしゅ」

バイパー「和んでる暇があるなら早く目的地に行ったほうがいいと思うよ」

あんまし行きたくないけど………

しょうがないよね……

ルーチェもそれを覚悟の上でアルコバレーノになったんだから私も逃げちゃダメ!!

そして山道

そろそろかな？

ザッ

ラル「誰だ!!」

??? 「俺だ、コラッ」

ラル「……コロネロ?!」

コロネロ「そうだ、コラッ」

雪「着いて来たんですね」

コロネロ「……? 小さい子供? か、コラッ」

雪「失礼なお兄ちゃんです」

フラン「まあまあ」

コロネロ「ところでこいつ、さっきからついて来てるんだけど? コラッ」

猫『雪ちゃん♪』

雪「ミルク?!」

ミルク『ついて来ちゃった』

雪「どうして………」

ミルク『だって雪ちゃんが心配なんだもん』

雪「ミルクが私を心配してくれるのは嬉しいけど………」

リボーン「…?猫の言葉が分かるのか?」

フラン「動物の言葉が分かるらしいでしゅー」

リボーン「ほう」

ルーチェ「素晴らしい能力ですね」

そしてなんだかんだで山の頂上

ラル「コロネロは離れている」

コロネロ「…?分かったぜ!!コラッ」

フラン「疲れましたー」

雪「私も………」

フラン「あれは……………」

雪「とうとうです」

フラン「そうですねー」

グワッ

一同「雪、ルーチェ「…!?!?」

今私達の目の前にどす黒いものが迫ってきてます

フラン「怖い……………」

雪「フラン……………」

ギュッ

フラン「…!?!?」

雪「大丈夫ですよ、私がついてます」

フラン「はいー」

コロネロ「くっ!?!?」

呪いが掛かる瞬間、コロネロが飛び出しましたー

ラル「…!?!?コロネロ!?!」

ピカッ

雪「えっと」

フラン「うーんとー（。）。」

雪「フラン……だよね？」

フラン「はいー…雪……でしゅか？」

雪「うん」

フラン「目線が低いでしゅー」

雪「私達はそんなに変わらない気がしますけど？」

フラン「それもそうでしゅねー」

一同「雪、フラン」……………

雪「やっぱこの運命はまだ誰も受け止められませんか……………」

フラン「この体、成長しないんでしゅよね？」

雪「大丈夫ですよ」

フラン「?..?」

雪「ルーチェ、帰ってもいいですか？」

ルーチェ「ええ、解散よ」

雪「行きますよ」

フラン「待ってくださいー」

リボーン「…餓鬼は無邪気だな」

風「でも、ルーチェの優しさとおの子達の無邪気さがあったから、私達はうちとけられたんですよ」

リボーン「言えてらあ」

こうして、私達のアルコバレーノになった日は終わりました

標的二 突然の襲撃（前書き）

一気に黒曜編まで行きました……………

さあせん

標的Ⅱ 突然の襲撃

雪side

なんか作者が面倒臭がつて黒曜編まで飛びました

えっと今までの事を整理すると

フランと私が付き合ってる

なんやかんやでリボーンにアルコバレーノだと言う事をばらされた

ツナとはお隣りさん

なんか神様の手違いで雪の特性と虹の特性が増えた

並中狩りが始まった

くらいかな？

雪「師匠……………」

フラン「多分ミー達は狩られないとは思いますがけどね……………」

雪「確かに……………何処の世界に弟子を狩る師匠がいるんでしょう？」

あ、因みにここは学校ですよ

獄寺（どうなってんだ？ 欠席してる奴が多いし……………十代目も来てね

え

ピー

携帯が切れましたね

獄寺「あつ、切れた……………」

獄寺「携帯の電池切れたんで帰ります」

雪「私も暇だし…帰ります」

フラン「待ってくださいー」

先生「こら、獄寺!! 貴様遅刻してきて今来たばかりだろ!!」

ガラッ

先生「お前もだ!!」

先生の声が聞こえたけど無視

並盛商店街

獄寺「……………なんでついて来るんすか?」

雪「安全の為」

獄寺「そうすか……………とりあえず飯でも食うか」

フラン「そうですねー」

ガサゴソ

チャリ

獄寺「げっ65円……」

フラン「うまい棒六個買えますねー」

??? 「並盛中学一年A、出席番号八番、獄寺隼人……」

獄寺「んん？」

フラン「柿ピー……」

千種「早く済まそう……汗、かきたくないな……」

獄寺「ふう……なんだ？てめえは？」

千種「黒曜中、一年、柿本千種……お前を壊しに来た」

フラン「ミー達もいることを忘れないでくださいー、柿ピー」

獄寺「知り合いか?!」

雪「まあ……ちよつとした……兄弟子？」

獄寺「ふーん……はぁ……なんでこう毎日他校の奴に絡まれるんだ？結構地味に生きてんのに」

雪「裏社会& a m p ; 不良なんだから地味に生きてるとは言わない
と思うけど……………」

獄寺「分かった、来やがれ

売られた喧嘩は買うのが主義だ」

フラン「これだから他校の奴らに絡まれるんですよ……………」

雪「同感……………」

通行人A「なんだあ？喧嘩かあ」

通行人B「面白いじゃん」

千種「…………見せ物じゃない」

シュツ

無数の針が通行人に襲い掛かる

カキン

雪「危なかった……………」

私は扇をブーメランのようにして投げて千種の投げた針を防ぎました

雪「早く避難してください」

通行人AB「ひいー」

逃げましたね

獄寺「ナイスです!! 雪さん!!」

千種「……………雪、邪魔しないでくれる?」

フラン「師匠といえど、仲間には手出しさせません」

千種「フラン……………生意気……………これ以上邪魔が入るとめんどい……急ぐよ」

シュッ

カキン

雪「獄寺君、こっち!!」

私は扇を盾の変わりに使い、獄寺君と物陰に隠れた

シュウ

そして獄寺君はボムを投げた

でも千種はヘッジホッグを取り出しそしてボムに攻撃した

獄寺「ヨーヨー?」

雪「そう……千種の武器は毒針が仕込んであるヨーヨー、ヘッジホッグ」

ドカーン

獄寺「うわっ」

爆発し、獄寺君が爆風に吹っ飛ばされた

クルッ

ざあ

獄寺君は空中で回転し、見事着地

獄寺（こいつ……ただの中坊じゃねえ……さっきといい、戦い方
といい……プロのヒットマンだ!!）

獄寺「てめえ、何処のファミリーのもんだ!？」

千種「やっど……当たりがでた……」

獄寺「ああん!？」

千種「お前にはファミリーの構成、ボスの正体、洗いざらい吐いて
もらう……」

獄寺「なに!？」

シュルルル

獄寺「どあ」

スタ

飛んで避けて綺麗に着地

獄寺「狙いは十代目か!？」

雪（早く来て!! ツナ君……）

続く

標的Ⅱ 突然の襲撃（後書き）

次回………傷つく友たち

標的三 傷つく友たち

雪side

獄寺「柿本千種とか言ったな……………お前等の狙いは十代目か!？」

千種「……………」

獄寺（ならぜってえ食い止めねえと……………）

シュウ

獄寺「二倍ボム!!」

シュルルル

獄寺「なっ!？」

またさっきと同じ……………ヘッジホッグで導火線を切ってる

そして獄寺が囲まれました!？

獄寺（囲まれた!？俺のスピードじゃ避け切れねえ……………出来ればこの技を使いたく無かったぜ……………
いくらちびボムだからって……………）

ドカーン

獄寺君がちびボムを取り出し、後ろに投げました

千種「なっ!?!」

獄寺（いてえんだよ!!）

そして爆風で獄寺は千種に突進しました

獄寺「食らいな!!」

千種「くっ」

千種は間一髪避けました

獄寺「まだだぜ!!」

獄寺はボムを出し

獄寺「二倍ボム!!」

千種「脳の無い奴……」

シュルルル

フラン「本当ですよー」

雪「それが狙いじゃない」

フラン「えっ?」

千種「なっ」

ドカーン

千種「くっ」

今ので相当なダメージを負ったはずです

獄寺「へへへへ……ざまあねえな」

フラン「そういう獄寺もボロボロですよー」

獄寺「うるせえ………てめえは簡単なトリックに引っ掛かったのさ
俺が二倍ボムの掛け声と友に通常のダイナマイトを放った時、既に
放っていたちびボムが同じ大きさに見える程お前に接近してたのさ
…ボンゴレ嘗めんじゃねえ」

千種「くっ」

獄寺「果てな」

フラン「柿ピー………」

雪「大丈夫？」

フラン「はいー」

ドドドカーン

ツナ「はあはあ」

ツナ（この爆発音ってまさか）

ツナ「獄寺君!!」

雪「ツナ君!!」

獄寺「十代目!! どうしてここにっ」

ツナ「うん、獄寺君が黒曜中に狙われてるって」

獄寺「なっ………そのためにわざわざ
恐縮っす………今、やっつけた所っす」

フラン「遅いんですよー」

ツナ「ええ!？」

獄寺「そこら辺に転がしといたので
………あれ? いない」

ツナ「ええ!？」

千種「手間が省けたね………」

グロテスク………千種

ツナ「ひいい」

ツナ（この人が黒曜の………なんかやばそうだ!?!）

雪「そりゃ並中風紀委員が倒される程だからね」ツナ（心読まれたあ）

シュツ

ツナ「うわあ!？」

千種は毒針を投げました

ザッ

獄寺君が庇おうと前に立ちました

カキン

更に私が毒針を弾きました

ツナ「獄寺君!？雪ちゃん!？」

雪「あっぶな」

獄寺「あ……………サンキュ」

雪「はいはい」

フラフラ

千種が近づいてくる……………

やっぱりグロテスク

ツナ「ひいい」

獄寺「十代目には指一本触れさせねえ!!」

千種「壊してから………連れていく」

獄寺「お逃げください!! 十代目」

ツナ「でも!!」

千種「めんどい………早く済まそう」

ツナ「ひいい」

???「なんかやばそうだな」

ツナ「山本!？」

山本「通り掛かったら、騒ぎが聞こえてき、来てみたら………こいつは穏やかじゃねえな」

ツナ「……………」

雪「山本君!!」

山本^{キッ}

ツナ（滅多に怒らない山本が……………）

千種「邪魔だ……………」

シュルルル

山本^{キッ}

ザクッ

おお……………山本君、ヘッジホッグを真っ二つにしちゃった

ツナ「斬った！？つか何時から山本のバット常備!？」

雪「そりゃ野球にも使えるし……………」

千種「そうか……………お前は並盛中、一年A、出席番号十五番、山本武」

山本「だったらなんだよ」

ツナ（あっ…そういえば山本って並中喧嘩の強さランキング二位だった）

人「お巡りさん!!こっちです!!」

げっ……………警察

警察「こら!!君達!!何している」

千種「お前は剣のほうだ……………揉めるのめんどい」

そう言って千種は差って行った

獄寺「ぐっ」

バタッ

獄寺君が倒れた

ツナ「獄寺君！？大丈夫！？」（焦）

山本「しっかりしろ！！獄寺！！」

病院

ビアンキ「どうして隼人が入院してるのがここなのよ」

シャマル「ビアンキちゅわーん」

ゲシッ

ビアンキ「寄るな！！」

シャマル「なんだよ……リボーンに言われたからベッド貸してやっ
たんだぜ？」

ビアンキ「隼人の看病は私がするわ……邪魔するなら出てって」

ツナ「ビアンキ……」

なんか逆効果な気もするけど……

シャル「んなことしたら………治るもんも治らんぞ？」

ツナ、雪、フラン「確かに／ですー」

山本「あはははは」

ビアンキ「山本武………何が可笑しい」

山本「いっ………俺………やっ………俺………別に…」

ビアンキ「別になって何？」

山本「何って………別に」

ツナ（獄寺君………俺のせいで）

雪「ツナ君………ゴメン………私がもつとしっかりしてたら」

ツナ「雪ちゃん………でも、獄寺君を守ってくれたじゃないか！！
だから軽傷ですんだんだよ」

フラン「落ち込まないでくださいー」

雪「何もやってない人に励まされても………」

フラン「あ………」

ツナ「ははは………」

ガラガラ

ツナ「ああ……俺、馬鹿だ
足手まといになっちゃって……行かなきゃよかった」

リボーン「後悔している暇はねえぞ、ツナ」

ツナ「なんだそれ!？」

雪「ハンモック?」

ツナ「ってか何してたんだよりボーン、この大変な時に」

リボーン「イタリヤで起きた集団脱獄を調べてたんだ」

ツナ「だ、脱獄?!」

リボーン「ああ、二週間前に大罪を犯した凶悪なマフィアばかりを
収容している監獄で脱獄事件が起きたんだ
脱獄の主犯は骸という少年」

雪、フラン（ピクツ）

リボーン「部下二人と日本へ向かったという……
そして十日程前、突然黒曜中に帰国子女として三人の少年が転入し
た」

ツナ「まさか……」

リボーン「転入早々、黒曜中学の不良を占めて、リーダーに収まっ

た男が…………六道骸という名だ」

雪、フラン「……………」

フラン（はぁ……………本当に何やってるんでしょー）

雪（確かに）

ツナ「もしかしくなくても、同一人物!？」

それって、何気なく相手がマフィアということ?!!」

リボーン「逆だぞ

奴らはマフィアを追放されたんだ」

ツナ「ああ!!俺どうなっちゃうの!？」

リボーン「骸達を倒すしかねえな」

ツナ「バカ言え!!そんな奴らに勝てる訳無いだろ!!」

リボーン「出来なくてもやるしかねえぞ」

ツナ「はぁ!？」

リボーン「お前宛ての手紙だ」

ツナ「誰から？」

リボーン「ボンゴレ九代目からだ」

ツナ「なあ！？九代目？！」ガサッ

リボーン「『親愛なるボンゴレ十代目

君の成長振りはリボーンから聞いているよ

さて、君も次のステップを踏み出す時が来たようだ

君に指令を言い渡す

六道骸以下、脱獄集を速やかに捕獲

そして捕らえられた人質を救出せよ

幸運を祈る』」

ツナ「ちよっ、なんだよそれ！？」

リボーン「『追伸、断った場合は裏切り者と見做す』」ツナ「わあ
！！俺には関係無いよ！！」

雪「ツナ……………」

リボーン「お前等はどうすんだ？」

フラン「ミーはパス」

雪「私も……………」

リボーン「そうか……………」

雪「じゃあ私達帰るね……………ちやお」

リボーン「ちやおちやお」

標的三 傷つく友たち（後書き）

次回、ヴァリアー来る

標的④ ヴァリアー来る(前書き)

早いと思ったら終わりです

今回はオリジナル満載です

標的 四 ヴァリアー来る

雪 side

暇…

フラン「雪」

雪「ん？」

フラン「デート行きませんか？」

雪「うーん…並盛商店街でなら…いいよ？」

フラン「え」

雪「今日は日曜日だよ？多分何処も込んでるよ…」

フラン「分かりましたー…並盛商店街でいいですー」

それに…ヴァリアーがそろそろ来ると思うし…ね

並盛商店街

スタスタ

フラン「何処に行きますー？」

雪「うーん…ラ・ナミモリーヌに行こう」

フラン「太っても知りませんよー」

雪「もう…太らないよ…ちゃんと適度な運動をしてるの知ってるでしょ？」

フラン「そうでしたねー…たまにはカップルらしい会話をしようと思っただけどねー」

雪「もう…／／／」

???「おい、そのバカップル」

フラン「…幻聴が聞こえたんですけどー」

雪「奇遇ですね…私も聞きました」

???「ちよっリボーン!!」

リボーン「無視すんじゃねえ!!」

フラン「はあ…なんのようですかー？ミー達…今デート中なんですけどー…邪魔立てするならスプラッターな幻覚見せますよー」

フラン「あれ？今日補習じゃありませんでしたっけー」

山本「サボってきた♪」

成る程…やっぱヴァリアー今日来るみたいね…でも、虹と雪の守護者は誰だろう？

恐らくこっち側の虹と雪の守護者は私とフラン…

向こう側は多分イレギュラー…

なんだろう…嫌な予感がする…

フラン「どうしたんですかー？」

雪「はっ…なんでもないよ」

ドカーン

ツナ「な、何!？」

京子「あーーーーー!! ツナ君あれ!？」

ツナ「えっ!?! えーーーーー!!!？」

空から人が…!! あれは…バジル君

このままじゃツナ君が

スウー

ボヨン

おお!! フランがバジル君を有幻覚で救いましたー

…メルヘンにシャボン玉なのは気になりますが…

フラン「ふう…ミィだってやる時はやるんですー」

バジル「う…ありがとうございます」

ツナ「だ、誰!？」

バジル「…お主…」

ツナ（お主?この二十一世紀にお主?!）

獄寺「十代目!！」

ハル「ツナさん」

山本「大丈夫か?ツナ!！」

ツナ「うん、フランが助けてくれたから…」

京子「よかった…」

リボーン（ん?なんであいつが此処にいるんだ?）

????「ヴォオオオイ」

バジル「はっ…ぐっ」

スクアードだ

スクアード「なんだあ?外野がぞろぞろと?邪魔するカスはたたっ

斬るぞ!!」

獄寺「ああ?」

山本「うっ」

ツナ「な、なんなの一体」

リボーン「嵐の予感だな…」

雪「うん…」

スクアール「いくぞお!!」

ドカーン

くっ…スクアールが衝撃波を放ってきた

ツナ「うわああ!?! なんなの、あの人お!?!」

スクアール「ヴォオオオオオオ」

京子「あああああ」

ツンツン

京子「あっ」

リボーン「女子供は非難するぞ」

京子「リボーン君」

ハル「ハヒッ」

京子「じゃあ雪ちゃんも」

リボーン「あいつは大丈夫だ」

ハル「でも!!」

リボーン「あいつはしっかりしてるからな…」

京子「…分かった」

バジル「すみません、沢田殿」

ツナ「えっ!?!」

バジル「付けられてしまいました…」

ツナ（誰だっけ…あっ!?!死ぬ気の炎!?!）

バジル「せっかく会えたのに…こんな危険な状況に巻き込んでしま
うとは…」

ツナ「えっ!?!あ、あの…誰でしたっけ?」

バジル「来て下さい!!」

ツナ「え?ええ??!」

獄寺「あ、おいこら！！十代目を何処に！！」

山本「ツナ！！」

タッタ

ツナ「え？ちよっ…なんなのお！？」

バジル「安全な場所へ！！お主に伝えたいことが」

雪「あ、バジル君！！」

フラン「待ってくださいー」

私たちも後を追う

ドカーン

バジル、ツナ「うわあ」

スクアーロ「ヴオオオオオオイ！！もう鬼ごっこは終わりにしようや！！」

ツナ「ああああ…出たあ」

スクアーロ「で？なんだあ？そいつは」

バジル（奴は沢田殿を知らなかったのか！？…しまった、此処はやり過ぎすべきだった…）

ツナ「あああ…あああ」

スクアール「ふん…そろそろ教えて貰おうか!!」

スクアールが剣を振り上げると

ツナ「わあああああああ」

ツナの情けない声が響いた

雪「情けないよ？ツナ君!!」

バジル「ぐっ…」

バキィ

バジル「うわああ」

雪「バジル君!!」

モフ

雪「……あ」

フランがバジル君を助けた…

今度は雲で…

ツナ「ホッ」

スクアール「ヴォオイ…」

ツナ「えっ!?!」

スクアール「そうだ…貴様だ」

ツナ「ああ」

スクアール「この餓鬼とはどういう関係だあ?ゲロツちまわねえとお…お前を斬るぜ!?!」

ツナ「うわあああ!?!そんな!?!えっと!?!あの!?!」

シュウウウ

ダイナマイトが頭上にあります

タッ

ドカーン

それをスクアールがジャンプで避けました

タッ

ドカーン

見事な壁ジャンプ…さすがヴァリアー

スクアール「なんだあ!!!!?」

獄寺「その方に手を上げてみる?ただじゃおかねぞ!!」

山本「まっ、そんなとこだ…相手になるぜ!!」

雪、ツナ「獄寺君!!山本君／山本!!」

山本「持ってきてねえのに、何故か俺のバットが立てかけてあつてな…ハハハハハ」

ツナ（リボーンの仕業だ…絶対）

スタツ

スクアールが降りてきた

スクアール「てめえらも関係あんのかあ?ヴオオオオイ…よくわかんねえが一つだけ確かな事を教えてやるぜえ…俺に盾突くと…死ぬぜえ」

獄寺「その言葉、そのまま返すぜ」

雪「殺ってみなきゃ分からないよ?」

フラン「その通りですー」

山本「ありゃあ剣だろ…俺から行くぜ!!」

雪「……………」

フラン（今の山本じゃあ…絶対勝てませんー…あのロン毛…出来ますー）

バジル「止めて下さい！！お主等の勝てる相手ではありません！！」

雪「その通りよ…」

獄寺、山本「ん？」

ツナ「そんなあ…」

バジル「相手が悪すぎます…」

ツナ「ああ…やっぱりやばいよ…」

霰『いい加減アタシにも暴れさせろ！！』

雪「えっちょ」

その瞬間…私の目の色が変わり、青から赤の目になった

雪が霰状態の時は普通に霰って表示しますby作者

霰「ふん…山本…ここはアタシに任せな」

山本「え？おい」

一同「フラン、霰（雰囲気…変わった？）」

フラン「霰…」

アタシがナイフを構えると

ツナ「ええ！？雪ちゃんの武器って扇じゃなかったけ」

スクアール「ヴォォオイ！！お前もナイフ使いか！！」

霰「そうだったね…アンタの所にもナイフ使いがいたね」

フラン「霰…無理はしないで下さいよ…」

霰「分かってるよ」

ボツ

アタシの武器に炎を燈した

雲の炎と雪の炎を

ツナ「紫と…白い死ぬ気の炎？」

霰「当たり前！！」

シュツ

ナイフを投げた

フラン「あちゃー…霰…あれ程雪にみんなの前では使うって言われてましたのにー」

スクアール「ヴォオイ…一本だけ投げても意味ねえぞ!!」

ボツ

バババババ

スクアール「だとお!？」

ツナ「増えた!？」

スクアール「くっ…幻術かあ!？」

霰「外れ♪全部実態…それだけじゃないし♪」

スクアール「だとお!？」

獄寺「なっ!?! ナイフが通った後が凍ってる…」

リボーン「二重の雪姫の本領発揮だな」

ツナ「リボーン!!」

リボーン「通りすがりの植木人間だぞ♪」

ツナ「植木人間が通りかかるかよ!! 今まで何処にいたんだよ!!」

リボーン「俺もいろいろあったんだぞ…京子達を非難させたり、このコスプレを押し入れから引っ張り出してきたり…」

ツナ「コスプレはなくていいよ!!」

スクアール「ヴォォォイ…お前、二重の雪姫と、言ったな…」

霰「だったら？」

スクアール「お前は偽者だあ!!」

霰「はっ!？」

フラン「何言ってるんですか!?!? 現に二重人格じゃないですか!?!?」

霰「そうだ!!」

スクアール「ほう…お前が噂に聞いた嘘吐き姫か？」

霰「そんな訳…ないじゃん」

フラン「そうですー!!」

スクアール「あん？」

霰／雪「嫌…嫌…いやあああああああ」

こうしてアタシの意識は手放した…

フラン side

フラン「雪!」

雪が倒れましたー…………

フラン「っ…」（睨）

スクアーロ「なんだったんだあ？」

バジル「沢田殿、逃げてください」

ツナ「えっ！？でも！！」

バジル「早く！！」

山本「俺が時間稼ぎするぜ」

ダッ

カキン

スクアーロ「ヴォオイ…お前、剣技習得してねえな！？」

山本「だったらなんだ！！」

スクアーロ「軽いぞお！！」

ガキン

山本「うわっ！！」

獄寺「次は俺だ！！果てろ！！」

スクアール「ヴォオイ!!」

シュシュシュ

獄寺「何ッ!?ぐわっ」

ツナ「獄寺君!!山本!!」

バジル「早くお逃げください!!ぐわっ」

ツナ「あっ!!君!!」

リボーン「お前も死ぬ気になれ!!」

バキューン

次回へ続く

標的④ ヴァリアー来る（後書き）

次回…ヴァリアー来る 続

標的 五 ヴァリアー来る 続（前書き）

前回ちょっと長引いたので…延長戦です

標的 五 ヴァリアー来る 続

引き続きフラン side

リボーン「死ぬ気になれ」

バキューン

死ぬ気ツナは死ツナと表記しますBY作者

死ツナ「リ・ボーン！！死ぬ気でロン毛を倒す！！」

そう言っつてツナはスクアアロに攻撃を仕掛けたがそれをスクアアロに受けとめられましたー

スクアアロ（ヴォオイ…なんてこった…死ぬ気の炎にこのグローブのエンブレムは…）

スクアアロ「まさかお前…噂に聞いた日本の…そうか！！あいつはお前と接触する為に…」

バジル「うう…」

スクアアロ「ますます貴様ら何を企んでんだあ？死んでも吐いて貰うぞお！！おらあ！！！！」

あー…煩いですねー

死ツナ「うおおおおおおお！！！！」

ツナはスクアアロにパンチを繰り出しましたー

ガシッ

そのパンチをスクアアロは受け止めましたー

スクアアロ「ニヤリ」ヴオオオイ…弱いぞお!!」

ブンッ

そして、スクアアロは剣でツナをふっ飛ばしましたー

フラン「ツナ!!」

こうなる事は予想してましたけど…

死ツナ「グアッ」

フラン「クッ…」

ミーは壁にぶつかるのをなんとか受け止めましたー

ドサッ

フラン「フウ…」

リボーン「死ぬ気弾じゃ、刃がたたねえか…本当は小言弾でハイパーな死ぬ気モードにしてえとこだが、あれを使うとツナは二週間筋肉痛で動けなくなるからな…」

フラン「えゝ…」

死ツナ「どりゃ！！うおおお！！まだだあ！！」

そう言ってツナはスクアアロに向かって走り出しましたが…

スクアアロ「おりゃ！！」

ドガン

ツナが返り討ちに遭いました…

死ツナ「うわああ！！」

またここに…

ドカツ

フラン「イデッ」

ドサッ

死ツナ「どりゃあ！！」

シュウウ

フラン「あっ…時間切れですねー…」

ツナ「ハッ）や、ヤバイ…ひいいい」

フラン「ダメツナどこ行くんですかー!?!」

スクアール「ヴォオオイ…何時まで逃げる気だあ?」

ツナ「ああ…」

スクアール「腰抜けがあー!」

シュパ

剣に仕込んである火薬がツナを襲いますー!!

ヤバイですー!!

ツナ「うわああああ!!」

フラン「間に合わない!!」

シュルルル

ドドドドカーン

これは…バジルのブーメランですー

スクアール「ちっ」

バジル「はあ、はあ」

フラン（ホッ）

ツナ「あ、ありがとう…」

フラン「バジル…ナイスですー…グッジョブ」

ツナ「君、大丈夫なの？」

バジル「拙者は、バジルと申します…親方様に頼まれて、沢田殿にある物を届けに来たのです」

ツナ「はぁ？俺に！？つうか親方様って？」

バジル「これです…」

そういうと、バジルはハーフボンゴレリングを出しましたー…家光によると、偽物らしいですけどー

ツナ「何？これ？」

バジル「何かは、リボーンさん、吹雪殿、フラン殿が知ってます」

ツナ「えっ！？リボーンと、雪ちゃん、フランのことを知ってるの！？」

バジル「リボーンさんは訳あって戦えません！！」

フラン「ミーも…ですー…九代目に許可を貰わないと…行けませんー…雪も本当は手出し出来なかったんですけどー…傷付けてないから…ぎりOKなんですー…」

バジル「これを持って逃げてください!!」

ツナ「ちょっ…急にそんなこと言われても…」

ドガン

ツナ、バジル「うわっ」

フラン「よっと」

ミーは間一髪避けましたー

スクアーロ「ヴォオイ!!そう言うことかぁ!!こいつは見逃せない一大事じゃねえか!!貴様等を片付けて、そいつは持ち帰らねえとな!!」

バジル「くそっ…」

ツナ「ちょっ…何なの?どうなってんの?」

リボーン「やべえな…」

スクアーロ「ヴォオイ…それ渡す前にどう片付けてほしい?」

バジル「渡してはいけません!!沢田殿!!」

ツナ「だ、だけど…」

ツナ（獄寺君も…山本も…雪ちゃんも…死ぬ気弾も敵わないのに…）

??? 「相変わらずだな…」

ツナ「えっ!？」

フラン「あの声は…」

??? 「スぺルビ」

ツナ「あっ!？」

??? 「スクアーロ」

ディーノ「子供相手にムキになって…恥ずかしくねえのか？」

ツナ「ディ…ディーノさん…」

フラン「跳ね馬!！」

続く

標的**五** ヴァリアー来る 続（後書き）

次回…ボンゴレリング七つ

標的六 ボンゴレ七つ（前書き）

今回も長引くかも

標的六 ボンゴレ七つ

フラン side

ディーノ「子供相手にムキになって、恥ずかしくねえの？」

ツナ「ディ…ディーノさん!!」

フラン「跳ね馬!!」

スクアールロ（跳ね馬ディーノ…くっ…この餓鬼はキャバンローネにこねを持っていやがるのか…）

ディーノ「その趣味の悪い遊びをやめねえって言うなら…俺が、相手になるぜ」

スクアールロ（跳ね馬を相手にするとなると…一筋縄じゃいかねえか…）

スクアールロ「ふっ…ヴォオオオオイ!! 跳ね馬!! お前をここでぶっ倒すのも悪くない…だが!! 同盟ファミリーと殺り合ったとなると…上がうるせえ!! 今日所は大人しく帰る!! わきやねえぞお!!」

ツナ「うわぁ!!」

フラン「ツナ!!」

くっ…スクアールロがツナの頭を持ち上げましたー!!

スクアール「ははははは!!」

ディーノ「ツナを離せ!!」

スクアール「はっ!!」

跳ね馬が鞭を振るってスクアールが火薬を放ちましたー

ドドドド

ディーノ「うっ…ツ、ツナ!!」

タタタ

跳ね馬がツナの元に駆け寄りましたー

ディーノ「お前達、大丈夫か？」

ツナ「な、なんとか…」

スクアール「相変わらず、あめえな!! 跳ね馬!!」

ツナ「えっ!？」

スクアール「今回は貴様に免じてこいつ等の命は預けといてやる…だが…こいつは頂いていくぜえ!! ヴォオオイ!!」

ディーノ「なっ!？」

バジル「ああ！！ボンゴレリングが！！」

ツナ「えっ？ボンゴレリング？」

スクアード「はっ！！じゃあな！！」

バジル「ま、待て！！」

フラン「あ、バジル！！」

バジル「うう…」

ディーノ「おい！！無茶すんな…」

フラン「そうですよ…」

リボーン「深追いは、禁物だぞ…」

ツナ「リボーン！！なんで今頃出てくんだよ…」

フラン「っていうか何時の間に着替えたんですかー？」

ツナ「なんで今頃出てくんだよ！！どうして助けてくれなかったんだ！？」

リボーン「俺は…奴に攻撃しちやいけねえ事になってるからな…」

ツナ「なんでだよ！！」

リボーン「奴も…V（フラン）ボンゴレファミリーだからです…」

言葉を被せんじゃねえ」

ツナ「えええ！！俺、ボンゴレの人に殺られそうになったのお！？ど、どういう事だよ！！うわああ」

リボーン「……………」

フラン「雪！！」

ウーウー

ロマーリオ「ボス…やばいぜ…」

警察ですねー

ディーノ「ああ…ツナ、話しは後だ…こいつ等の手当てをしねえとな…」

ツナ「獄寺君！！山本！！雪ちゃん！！」

獄寺「あっ…十代目！！ご無事でしたか！！」

山本「ツナ！！」

ツナ「二人とも、大丈夫！？」

山本「ああ…」

フラン「雪……」

獄寺「申し訳ありません…次に会ったら必ず奴を倒して見せます！
」

山本「まだ、その辺りにいるんじゃないか!？」

フラン「少し…静かにしといってもらえます?」

獄寺「えっ!？」

スウー

リボーン「フラン…力を使うのか…」

ミーは幻術を解きましたー

駄作者が書くの忘れてましたけどー…雪も幻術が解けて赤ん坊の姿
ですよー

フラン『癒しの虹』
アルコバレーノ・コンフォルト

ポワワア

獄寺「傷が!!」

山本「癒えてく…」

フラン「ふう…雪達はなんとかりましたけどー、バジルは早く病院に連れてった方がいいですー」

ディーノ「あ、ああ!!」

リボーン「あ、そうそう…お前等は帰っていいぞ」

獄寺「リ…リボーンさん…!!」

リボーン「さっきの戦いで分かっただろ？今のお前等の戦闘レベルじゃ、返って足で纏いになるだけだ…」

山本、獄寺「うっ…」

ツナ「リボーン!!何言ってるんだよ!!」

リボーン「行くぞ…ツナ」

レオンをロープにしてツナを捕まえましたー

ツナ「えっ!?!うわああ!!ちよっちよっ」と

フラン「あ、待ってくださいー」

ミーも雪を背負ってリボーンの後を追いますー

ツナ「おい!!リボーン!!」

リボーン「本当は…」

ツナ「えっ!?!」

リボーン「あいつらも…感じている筈だ…」

ツナ「えっ」

リボーン「あれだけ一方的にコテンパンにされて腸が煮え繰り返ってねえ筈がねえ」
はらわた

ツナ「あっ…」

リボーン「今はほっとけ…」

中山外科病院↑細かい…

ディーノ「バジルはどうだ？…ロマーリオ」

ロマーリオ「命に別状はねえ…フランの力が作用してるみてえだ」

ツナ「…あの…で、彼、何者なの？やっぱりボンゴレファミリーの人なんですか？」

ディーノ「嫌…こいつはV（フラン）「ボンゴレじゃありませんよ」被せるなよ…だが、一つ確実に言える事はこいつは…T（フラン）「ツナの味方ですよ」だから被せるな！！」

ツナ「はぁ！？どうなってんの！？ボンゴレが敵で、そうでない人が味方って…つうか別に俺、敵とか味方とか、ありませんから！！」

ディーノ「それがなあ…ツナ…そうも言ってもらえねえみたいだぜ」

リボーン「あのリングが動き出したからな…」

ツナ「リング？そういえばこの子も言ってた…ボンゴレリングとか

」

リボン「ああ……正式名を、ハーフボンゴリング……というんだ……
本当は三年後まで然るべき場所で保管されるはずだった……ボンゴレ
の家宝だ」

ツナ「もしかして……スゲー高級な指輪だとか？」

リボン「確かに：値の付けられない代物だが：それだけじゃねえぞ：長いボンゴレの歴史上、この指輪の為にどれだけの血が流れたか分かんねえという：曰く付きの代物だ：」

ツナ「うわああ!! 何それ!?! マジかよ!! ハア: ロン毛の人が
持っててくれてよかった」

デイナー「それがなあ……ツナ……」
(苦笑)

ツナ「はい？」

デイナー「ここにあるんだ…」
(苦笑)

ツナ「……………」
（啞然）

うわあ……目をパチパチして思考停止ですねー

∴耳栓、耳栓

ツナ「ええええええええええ！！！！な、なんで！？だって奪われた筈じゃ…」

ディーノ「こっちのが本物だ」

ツナ「じゃあさっきのは…」

ディーノ「この為に来たんだ…ある人物からこれをお前に渡すように頼まれてな…」

ツナ「お、俺に！？なんで俺なの！？そんな怖いリングー！」

ディーノ「そりゃあ、お前がボンゴレの十代目のK（ツナ「ストップ！！ストップ！！ストップ！！」）」

ツナ「俺、家に帰って補習の勉強をしなきゃ…頑張ろう…」

ディーノ「あ、おい！！ツナ！！」

ツナ「じゃあ…ディーノさん…また！！」

ボタン

リボーン「ツナの奴…それはそうと、フラン…」

フラン「ん？」

リボーン「ツナの奴も行った事だし…雪のこと…教えてくれねえか？」

フラン「えー…嫌ですよー」

リボーン「俺達は誰にも言わねえし、あいつをのけ者にしない…」

フラン「……………分かりましたー」

フラン「雪は…転生者ですー」

ディーノ「転生者？」

リボーン「すると…一回死んだけど…前世の記憶を持って生まれてくるってことか？」

フラン「しかも…パラレルワールドから転生してきた子なんですー」

ディーノ「パラレルワールド？」

リボーン「もしもの世界…つうことか…」

フラン「はいー…しかも、リボーン達の事が漫画やアニメになっている世界みたいですー…だから先の事が分かるんですよー…最もミーはリボーンの漫画やアニメには出てるみたいですけどー虹の波動やこの時代でこの年になってる時点でイレギュラーみたいですけどー」

リボーン「そうか…」

フラン「あの時叫んだのはトラウマの所為みたいですー」

ディーノ「トラウマ？」

フラン「転生前…姉妹揃って嵌められて虐められてたんですよー」

ディーノ「姉妹？」

フラン「はいー…転生前、雪より先に他界した姉、霰がいたんですよー…事故死って聞いていますー」

…霰が事故死して以来、雪が寂しさで作ったもう一人の人格…霰が生まれましたー」

リボーン「成る程な…」

フラン「誤解はなんだかんで解けて、転生前はクラスのみんなと仲良くして、いじめっ子は自殺しましたー」

リボーン「ほう…」

フラン「あ、因みに虐められてた時に言われていたのが嘔吐き姫、嘔吐き姉妹だったそうですー」

リボーン「…！？それってスクアアロが言ってたことじゃねえか…」

フラン「…だからトラウマの所為だって言ったでしょー？因みに雪と虹の守護者はイレギュラーだと思いますよー？雪が言うに本来虹と雪の属性は無いらしいですからー」

ディーノ「…そのいじめっ子…たしか死んでるんだよね？」

フラン「はいー」

ディーノ「俺の予測が正しければ…転生中に紛れ込んだのかもしれない…なんせ嵌める程…ずる賢い奴だからな…」

フラン「ミーもそう思いますー…雪が言うに可愛い系と美人系なん

ですからヴァリアーもすぐに信じると、ミーは思いますー」

ディーノ「えっ！？虐めてたのは二人なのか！？」

フラン「雪と同じ…双子らしいですー」

リボーン「マジか…」

フラン「転生前は頭も良かったですし、性格もいいし、スポーツ万能ですしオマケに顔も良いから多分嫉妬されたんでしょーね…」

リボーン「だが、雪と虹は結構貴重な波動だぞ？」

フラン「多分…嘘を吐いてるか、転生する時に何らかの影響で体質変化したか…ですねー」

リボーン「今回は多分…ヴァリアーと戦う事になる…雪は大丈夫なのか？」

フラン「…あいつ等と戦う時、多分暴走し兼ねないですねー…なんせ相手はいじめっ子の上に二重人格は精神的に保つのが大変なんですー…」

リボーン「そうか…」

続く

標的六 ボンゴレ七つ（後書き）

次回…ボンゴレ七つ 続

標的七 ボンゴレ七つ（前書き）

思ったとおり長くなった

標的七 ボンゴレ七つ

フラン side

リボーン「そうだったのか…それともう一つ…聞きたいことがある」

フラン「はいー？」

リボーン「あの炎はなんだ？」

フラン「はいー…こっちの方は雪に許可を貰ってるので話せますー」

フラン「あの炎は死ぬ気の炎…さっき雪が出したのは雪と雲の炎…多分大して傷がないのに倒れたのは死ぬ気の炎の出しすぎでしょー」

ディーノ「どういうことだ？」

フラン「元々死ぬ気の炎は誰でも体内に流れている言わば血の様な物なんですー…血を流し過ぎると貧血になるでしょー？それで倒れたんですよー…勿論精神的なダメージもありましたがー…」

リボーン「成る程な…」

ガサゴソ

フラン「こういうリングから覚悟を炎にして死ぬ気の炎の完成ですー」

ボッ

ミーはリングを出して霧の炎を出しましたー

フラン「勿論ボンゴレリングも死ぬ気の炎が出ますよー…因みに属性ごとに色があって大空はオレンジ、晴は黄色、嵐は赤、雨は青、雲は紫、雷は緑、霧は藍色、虹は七色、雪は白なんですよー」

リボーン「雪の属性は一つの波動以外にも持つことは可能か？」

フラン「まあ、希少ですけどねー…ミー達は大空の七属性全部を持っていますよー」

ディーノ「マジか!!」

フラン「マジですよー…因みにこの炎は武器にも燈すことが可能ですー…」

リボーン「そういえば雪のナイフが増殖したが…あれは？」

フラン「あれは雲の炎の特性の『増殖』ですよー…地面が凍ったのは雪の特性『凍結』ですよー」

ディーノ「特性？」

フラン「はい…死ぬ気の炎はそれぞれに特性があるんですよー…大空は調和、晴は活性、嵐は分解、雨は鎮静、雲は増殖、雷は硬化、霧は構築、虹は癒しと具現、雪は凍結と守りですよー…その内これ等の属性を生かした武器が出来ますよー」

リボーン「そうか…分かった…もう帰っていいぞ」

フラン「失礼しますー」

リボーン「あ、忘れ物だ!!」

ポイ

フラン「ん？」

パシッ

フラン「雪と…虹のボンゴレリング…」

リボーン（二ツ）

フラン「…これ持っているとヴァリアーに攻撃していいんですねー？」

リボーン「ああ、九代目の許可が下りた事になるからな」

フラン「はぁ）…本当に失礼しますー」

ボタン

フラン「しかし…ツナ…まだ自分の立場から逃げられると思ってるんですかねー？」

それに…バジルも囧でしたし…多分…バジルにもバジルが囧だつて事を知らされてないらしいですし…

ツナの家の前

ん？

洗濯物がいっぱいですねー…多分家光が帰ってきたんですねー

夜

自宅

フラン「はぁ…今日は最悪ですー…デートに行ったらリボーンに邪魔されるし、ヴァリアーのスペルビ・スクアーロが来るし…雪は今日一日中寝たまんまだし…今日はバタバタしすぎですー」

多分、ザンザスの超直感でフェイクもすぐ見破られると思いますー

フラン「はぁ…でも…凄く…嫌な予感がしますー…もしかしたら…雪…皆さんは…信じてくれますよねー？」

朝

雪side

雪「ん？朝？確か…あの時…思い出したくも無い！！フラン…嫌な予感がする…ん？ボンゴレ…リング？」

朝起きたら私の首に雪のボンゴレリングがかかっていた

雪「これが…雪のボンゴレリング…か」

フラン「ん？ゆ…き？雪ー！」

雪「フラン、お早う…」

フラン「大丈夫ですかー?!」

雪「うん…ちょっとした貧血だったけど…もう大丈夫!!」

フラン「よかったですー…」

雪「じゃあ早く起きちゃったしバジル君のお見舞いにも行く?」

フラン「はいー、行きますー」

中山外科病院

ガララ

雪「デイナー、いる?」

フラン「跳ね馬ーいますかー?」

山本「雪、フラン」

獄寺「雪!! フラン!!」

ツナ「大丈夫なの? 雪ちゃん」

雪「平気平気♪」

フラン「ツナは分かりますけどー、なんで山獄までいるんですかー」

？」

獄寺「セットで呼ぶの…止めろ」

山本「…？」

獄寺「キャバンローネの奴に聞いたんだ」

山本「そういえば今朝、妙なことがあってさ」

獄寺「そうなんすよ」

へー…今からツナ君にリングを見せる所に私たちが入ってきたのね…

山本「今朝、新聞を取ろうとポストを開けたらこんな物が入ってたんだ」

獄寺「俺のところにもこれが…」

フラン「ミーは昨日、リボーンに渡されましたー」

雪「私のはフランに寝てる間首に下げられた…」

フラン「だってそこら辺に置いとくと無くしそうですからねー」

獄寺「もしかして…昨日の奴絡みかと思ひまして…」

ツナ「わああああ!!そのリングってまさかあ!!」

山本「これ、なんだか知ってんのか?ツナ」

ツナ「ヤバイって!!これ持っていると狙われるんだよ!!」

山本「そうなのかぁ…」

獄寺「やっぱ、十代目も持ってるんですね!!」

フラン「そりゃあ十代目時期ボスですからねー」

ツナ「つうか…なんで四人の所にも!？」

雪「ツナの周りでいい守護者が私達しかいなかったから？」

フラン「まあ、雪と虹の波動は希少ですからねー」

ディーノ「こいつ等も選ばれたからだ…」

ツナ「ディーノさん…リボーンも!!」

リボーン「ボンゴレリングは全部で九つあるんだ…そしてそれを九人のファミリーが持って、初めて意味を持つ物だからな…」

ツナ「九人のファミリー？」

リボーン「お前以外の八つのリングは時期ボンゴレボス、沢田綱吉を守護するに相応しい八名に届けられたぞ」

続く

標的七 ボンゴレ七つ（後書き）

次回…カテキヨー、動く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0132z/>

リボーンに転生トリップしちゃいましたー!?

2011年12月3日16時49分発行